

エスペラント教育の意義と可能性

北川 郁子

1. はじめに

私は、神奈川の県立高校で、外国語科教師として主に英語を教えてきた。「主に」と言うのは、英語以外にもエスペラントを部活動で、あるいは正規の授業の中で教えてきたからである。

私がエスペラントと出会ったのは 80 年代の初めだった。そのころ私は、横浜の新設 3 年目の高校で教師としての一步を踏み出したばかりで、毎日が自問の日々だった。当時の心境を綴った文章がある。

「なんで英語やるの？」一恐らく、英語教師の中でこの疑問を自己にぶつけたことのない人は、ごくまれではないだろうか。進学校であれば、「文系でも理系でも、英語ができなければ大学に受からない」と言ってしまうとそれで終わりなのかもしれない。だがそんな論理が通用しない生徒はいくらでもいる。「動機づけ」が何よりも大切と考える教師たちは、あれこれ理屈を考え出す。「英語は今や国際語」「日本は島国だから、世界の人々と協調しなければ生き残れない」、「世界に視野を広げるためにも」等々。

私自身も、教師になった当初は、それらの考えに近い立場をとっていた。だが、授業を通して生徒たちと接するうちに、英語一辺倒の外国語教育が生徒たちの世界観、価値観に及ぼす影響に次第に気づき始めた。それは、今の日本の文化・社会状況をそのまま反映していると言えばそれまでだが、「国際」と言いつつ、その中身はアメリカもしくは西洋一辺倒なのである。アジアへの無知と蔑視、西洋志向といった明治以来の日本的体質を再生産することに最も寄与しているのが英語教育であるように思えてきた。(北川 1985)

これは、教師になって数年たったばかりの私自身が、神奈川県高等学校教科研究会英語部会誌に研究・実践報告として記した拙稿の冒頭のことばである。

私がこのような疑問を持ち始めたきっかけの一つは、男子生徒たちが、横浜駅周辺で彼らが経験した朝鮮高校の生徒たちとのトラブルを差別的なことばを使って語ってい

るのを聞いた衝撃だった。生徒たち一人ひとは愛すべき子どもたちで、放課後彼らと何度も話し合ったのは私の懐かしい思い出だ。だが、当時は、日本人高校生と在日韓国・朝鮮人高校生との小競り合いが、横浜のみならず全国でしばしば起きていた。今思うと、今日、ヘイトスピーチなる人権感覚も何もない排外主義的な動きが前面に出てしまった源流はその辺から始まっていたのではないだろうか。

私がある時に強く感じたのは、近現代史をきちんと教えない歴史教育もさることながら、なぜ日本では隣国のことばを学校で学ぶことができないのか、アジアの国でありながら、韓国・朝鮮語も中国語も学ぶことができない外国語教育への疑問だった。

その時から 30 年余りがたち、日本の外国語教育はどう変わってきたのだろうか。唯一進歩があったとするなら、教科書で取り上げる題材が「アメリカもしくは西洋一辺倒」でなくなったことだろうか。しかし、ソ連の崩壊という大きな歴史の流れ、政治的・経済的にますます強化される日米同盟などを要因として、教えられる言語の「英語一辺倒」傾向はいっそう加速度的に進んでいるのが日本の学校現場の現実である。韓国・朝鮮語ひとつを例にとってみても、学びたいと思っている生徒は 30 年前と比較できないくらい増えたにもかかわらず、学校で履修できるところはいまだ非常に少ない。韓国のポップカルチャーの人気は、大人の予想をはるかに超え、年々広がっており、ハングルを自分で覚えたという生徒たちを高校生の中に見つけることは、昨今さほど難しいことではない。このことを教育関係者はどれだけ認識しているだろうか。また、ICT(情報コミュニケーション技術)教育の中での外国語の活用は、インターネットが、当初よりもはるかに多言語化が進行しているにもかかわらず、英語による情報収集、発信に偏りすぎている。

本稿では、英語科の教員として自己矛盾を感じながらも、エスペラントを自ら学び始め、教えてきた私自身の経験を踏まえ、教育におけるエスペラントの今日的な意義を考察してみたいと思う。

2. エスペラントとは何か

1887 年、当時ロシア領であったポーランドで、ワルシャワ大学を卒業し眼科医となったユダヤ人青年ザメンホフが、一つの国際語の案を発表した。世界中の人々がことばの違いや民族間の対立を乗り越えて、自由・平等に、そして平和にコミュニケーションできたら、という素朴な希望を込めたものだった。共鳴者たちがその案を実用することによって言語案は実際の言語となり、世界に広まっていった。それがエスペラントである。現在、積極的な使用者は世界で数十万人から百万人と言われている。屈託のない若者た

ちのおしゃべりや恋愛、文学作品の創作・翻訳、科学分野における論文執筆・意見交流、さまざまな国際会議にいたるまで、国際的な舞台で幅広く使われている。なお、「エスペラント」という言語名は、「希望する人」を意味するザメンホフのペンネームに由来する。

『英語教育』2014年1月号で、上智大学の木村護郎クリストフ教授は、エスペラントによるコミュニケーションの特徴を英語によるコミュニケーションと比較しながら、「エスペラントがそれ自体として興味深い言語であるのみならず、国際語としての英語の教育に携わる人にとって示唆に富む」と述べている。

エスペラントは、「対等で安心なコミュニケーション」が売りである。対等性については、一方にはいわば生まれながらにその言語をあやつる人がいて、他方にはものすごい努力をしても「ネイティブ」には及ばない人がいる、という異言語間コミュニケーションに通常つきものの格差が存在しないことが大きい。(木村 2014)

「ネイティブはそうは言わない」と言われたら、その表現は誤りになってしまう不安は、私を含めて多くの外国語学習者が経験していることだが、エスペラントに関しては「母語話者のいない自由さ」が魅力の一つである。

エスペラントは、ギネス世界記録も公認する世界一規則的な言語である。たとえば動詞は現在形を-as、過去形を-is という語尾で、「捕まえる」という意味の動詞(英語では catch)なら、語根 kapt-にそれらの語尾を付けて kaptas(捕まえる)、kaptis(捕まえた)などとなる。英語の不規則動詞(catch-caught)を覚える手間は省けることになる。「日本語や英語のような民族語は歴史的な経緯の結果、いわば交通ルールが複雑で、基本的に右側通行だけれどこれこれの道路では左側通行、といった具合であるのに対して、エスペラントの場合、一度おぼえたルールは頼れるのである。もちろん民族語の場合は母語(第一言語)として覚えるのが基本なので、いくら複雑であってもかまわない。ところが非母語話者同士で共通語として使うための言語にとって、やっかいな不規則や例外は迷惑でしかないので、それを整理したのである。」(木村 2014)。学習者にとってうれしい規則性は、品詞語尾の統一にもみられる。名詞は-o、形容詞は-a、副詞は-e という語尾で終わる。

さらに、単語を覚える負担を大きく軽減させる造語力の豊かさもエスペラントが「省エネ言語」と言われるゆえんである。たとえば nova(新しい)に「逆」を表す mal-をつけると、malnova(古い)となる。mal-は、意味をなす限り何につけてもよい。動詞語尾をつけ

て *malas* (逆である)、副詞語尾をつけて *male* (逆に) などとすることさえ可能である。だからといって、好き勝手に造語ができるわけではなく、1905 年に「エスペラントの基礎」(*Fundamento*) というものが定められていて、それを守ることが最低限の約束になっている。

言語学者・田中克彦氏は、岩波新書『エスペラント—異端の言語』(2007)の中で、「体系性が規範を破って進む！」と、エスペラントの特長をわかりやすく説明している。例えば、英語では *catch—caught* が間違いで、*catch—caught* が正しいと、子どもたちが頭ごなしに叱りつけられる例を挙げ、「なぜこんなメチャクチャな形になっているかは、親も教師も説明できない。説明できるのは、英語史に通じた専門家だけである」と喝破する。そして、「こどもたちにエスペラントを教えれば、かれらはおもしろがって大喜びでやるにちがいない。理由のない「規範」がなくてせいせいするからだ。」(田中 2007, p.73) と言う。

3. なぜエスペラントを学び始めたのか

私が「英語一辺倒」に疑問を感じ始めた要因は、冒頭に書いたこと以外にもあった。英文科に籍を置いた学生時代、私にとっての「国際交流」とは、英語だけを媒介にした留学生や在日外国人との交流を意味した。ところが、教員になった 1 年目の冬休みに一人旅をしたフランス、イタリアでの体験が、私の頭の中の「英語過信」を見事に打ち砕いてくれた。英語は、確かに空港やホテルで必要かつ便利なことばである。しかし、一歩街に出れば、そこで生活する人々との交流に英語は用をなさなかった。突然の大雨で困っている私をテントに入れてくれたベルサイユの市場のおじさん、道に迷った私を “Solo?” と身振り手振りで案内してくれたローマの初老の女性…。彼らに英語で話しかけても返ってくるのはフランス語であり、イタリア語であった。

帰国後、私は猛烈にさまざまな言語を学びたくなり、大学で第二外国語として選んだフランス語をはじめ、イタリア語、中国語、韓国・朝鮮語、アラビア語、スペイン語等々、いろいろなことばの独習書に手をつけた。しかし、どれも途中で挫折した。一つの言語を学ぶには、それなりの覚悟、時間、動機づけがないと無理であることを再認識した。

そんな私が最後に手にしたのが、高校生の頃から憧れを抱きつつ、学ぶ機会がなかったエスペラントだった。きっかけは、偶然、新聞の書評欄で見つけた『ドナウの彼方で』(藤本ますみ著、中央公論文庫、1978) という一冊の本であった。親子でエスペラントを

学びながらブルガリアに一年間留学し、生活をした体験記録だった。「エスペラントは生きた言葉なんだ!」。その本を読んですぐに、私は、大学書林の独習書シリーズ『エスペラント四週間』を始めた。他の言語で挫折した私にとって、この本は奇跡のように思えた。スイスイと4週間の全教程が終わったのである。「こんな学びやすい言語がある!」という感動。でも、まだエスペラントを話せる人には誰にも会っていないという懐疑的な思いが交錯した。

しかし、まもなく私は日本エスペラント協会から地元のエスペラント会を紹介してもらい、初めてエスペラントを話す人々に会うことができた。幸運なことに、その三か月後に、第一回の「日韓青年エスペラントセミナー」(現在は「東アジア青年エスペラントセミナー」として中国、ベトナムも加わった4か国で順番に毎年開催)が韓国で開催されるという情報も得た。「近くて遠い国」と言われていた韓国。当時、韓国については、歴史教科書の記述をめぐって反日感情が高まっていると連日報道されていたが、私は即座に参加申し込みをした。1982年の夏のことだった。セミナーは、3泊4日にわたって韓国のソラク山のふもとにある小学校を貸し切って行われた。夜は満天の星を見上げるような、素晴らしい自然環境の中で、教科書問題をめぐる討論会やレクリエーション、恋愛談義にいたるまで、韓国の学生や若い人々と交流したことは、私にエスペラントを「生きた言葉」として実感させる貴重な体験となった。

4. エスペラントを教える

エスペラントの有用性を実感した私は、その後、転勤したばかりの川崎市にある県立住吉高校でエスペラント部を創設。部活動の中でエスペラントを教え、アジア、ヨーロッパ、南米等、海外からのエスペランティスト(エスペラント使用者)をたびたびゲストとして迎えたり、海外文通で得たさまざまな国のきれいな切手を葉にして文化祭で販売、その売り上げをポーランドの障害を持った高校生に義手を贈る運動につなげるなど、英語圏に偏らない交流活動を11年間続けた。

その後、横浜市にある新羽高校に異動となった私は、当時の新学習指導要領が学校裁量で新たな科目を設置できるよう大幅に改訂されたことを知り、3年生の必修選択授業で「エスペラント」を設置することを提案した。幸い、英語科の先生方はスペイン語や他の言語を学んでいる方も多く、提案を支持してくれ、また他の同僚や管理職の理解を得ることもでき、「日本で初のエスペラント授業」が実現することになった。新聞で大きく報道されたり、他の高校への波及もあった。授業にはウクライナからの女子学生や

ベルギーからの盲目の高校教師など、年に数回、国も年齢もさまざまなエスペランティスト(エスペラント使用者)をゲストとして迎えた。「英語よりも点がとりやすい」こともあり人気のある講座の一つだった。(授業は 1998 年から 13 年間、私が他校に異動になった後も続いたが、カリキュラムの改訂に伴い 2011 年に終了した。)

現在は「英語必修化」の波で、普通科では他言語を教えることが困難になっているが、「総合的な学習の時間」の授業でエスペラントを教えることはしばしば行ってきた。地域では、長年、市民サークルでボランティアとして若い人たちにエスペラントを教えている。エスペラントの海外無料ホームステイ・ネットワークを利用して、数か月の学習ののちアジア、ヨーロッパの旅に出るたくましい若者たちも出てきている。

エスペラントを教えることの意義はなんであろうか。これまでに述べたように、英語圏に偏らないさまざまな人々との出会いを可能にすることと並んで、多言語の世界に目を開かせる教育的効果がある。エスペラントを通じて多様な言語的背景を持つ人たちと出会うことにより、世界の多言語性に自然と目を開かせられる。

また、エスペラントを学ぶことによる「予備教育効果」というものが知られている。ある外国語を学ぶ子どもたちを二つのグループに分け、一つのグループは、最初からその言語を学習し、もう一方のグループはエスペラントを一定期間教えたのち、その言語の学習を始めるようにした。その結果、数年後の到達度は後者のほうが高いということが示された。これは、規則的なエスペラントをモデルとして、ストレスの少ない言語学習を体験することにより、言語学習のコツがつかめるようになることが大きい。またそれとともに、人間の言語というものの本質を直感できるようになるということもあるかもしれない。

こうしたエスペラントの「予備教育効果」を明らかにした実験教育は、ヨーロッパでは 60 年代に行われ、同様の実験が中国の山西省太原市の小学校でも現在続行中で、今年の 10 月に京都で開催された ILEI (国際教育者エスペラント連盟) のアジア・セミナーでもその経過が報告された。エスペラントが他の言語を学ぶ妨げになるのではなく、むしろ他の言語学習の助けになるという事実は、とりわけ言語教育に携わる人々に、もっと知られてもよい。

「ダーリンは外国人」シリーズで知られるトニー・ラズロ氏は、しばしば著書の中で、エスペラントがいかに覚えやすく合理的な言語かということに言及している。最新刊『ダーリンは外国人—ベルリンにお引越し』(小栗&ラズロ 2014)には、息子トニーニョが日英独の三言語に加えていずれフランス語も学ばなければならなくなるのなら、その前にエスペラントを教えようかと思案していることが書かれている。「だって、同じラテン語をベースにした、しかも規則正しいエスペラントを学んでおいたほうがフランス語学習が楽

になる、と言われている。」(p.119)。また、日本でもエスペラントを最初の外国語として学んだ子どもは、中学校での英語の習得が容易になることは、数多くのエスペランティストが経験的に語っている。

5. 言語権とエスペラント

エスペラントに対する誤解の一つに、エスペラントの背後には「母語を否定し、世界を一つの言語に統一すればよい」という思想がある、というものがある。それは全くの逆である。エスペラントの理想は、異なることばを話す人々が対等な立場でコミュニケーションできることである。それは少数民族の言語の尊重にもつながる。それは、ことばによって差別されないことをうたう言語権の思想と共鳴している。1998年には、世界人権宣言50周年を記念するセミナー「言語と人権」が、世界エスペラント協会の提案によってジュネーブの国連ヨーロッパ本部で行われている。国連やEUなどが主催する言語問題に関する会議やセミナーにおいても、エスペランティストは積極的な役割を果たしてきている。(詳しくは、東北大学大学院文学研究科教授・後藤斉氏のサイト参照)

6. 多文化共生とエスペラント

この間、私自身も、世界エスペラント大会や国際青年大会(毎年世界のどこかの都市で1週間にわたり行われている)、国際教職員連盟等のさまざまな国内外でのセミナーに参加し、30数か国に及ぶ国々をまわり、60か国以上の人々が集まる大会で通訳なしで交流する醍醐味を味わってきた。英語を媒介言語とすることで一見同じような体験ができるかもしれない。しかし、英語を母語とする人々とそうでない人々との越えがたい溝を意識しないですむエスペラントを話す時の自由な感覚は、なにより心地よいものだ。職業柄、英語を使った会議に出ることもあるが、そこにはどうしてもネイティブと「対等に」議論することの不平等さを意識せざるをえないことがある。

「多文化共生」がことばで語るほど簡単なものではないことは多くの人が経験していると思う。多様な価値観の人々に会うこと、今世界で起きているさまざまな出来事に関心を向けること、などといったごく素朴な「他者への関心」こそが、多文化共生教育に欠かせないことだと思うが、エスペラントの特性は、まさにこの「他者への関心」を呼び起こし、後押しするものである。

私は今夏アルゼンチンでの第 99 回世界エスペラント大会に参加したが、硬軟さまざまなプログラムが同時進行する中で、大会テーマ「孫世代は私たちを祝福するか？—持続可能な未来への努力」に沿った講演会のいくつかに参加した。その中で、ブラジルの若い研究者 Alvaro Motta 氏による講演「持続可能な世界のための持続可能な経済とは」が大変印象に残った。彼は、ガンジーの有名なことば、「世界はすべての人々を飢餓から救うのに十分広く大きい、少数者の食欲さを満たすには常に小さい」La mondo estas sufiĉe granda por satigi la bezonon de ĉiuj, sed ĉiam estas malgranda por satigi la avidecon de malmultaj' を引用し、エスペランティストにできることは何かを参加者に問うた。彼は、世界の多様な人々と知り合い、友だちになれるエスペランティストこそ、今、世界で何が起きているのか、とりわけ敏感に感じ取れる人々であり、行動を起こせる人々なのではないかと結論づけた。

「積極的な使用者が数十万程度のエスペラントは、普及度という点ではどうい国際補助語として英語にとってかわる存在ではない。しかし国際交流の一つの選択肢として、また英語教育や国際コミュニケーションのあり方への問題提起として、注目に値する存在ではないだろうか。」(木村 2014)

私は、学校教育では英語以外の言語も選択できる外国語教育を、と主張し続けてきた。その選択肢の一つにエスペラントが入ることが望ましいと考えている。真にグローバルな地球市民教育、多文化共生教育の一助としてエスペラントが見直されることを願ってやまない。

(神奈川県立多摩高等学校)

参考文献 関連サイト

- 小栗左多里 & トニー・ラズロ(2014)「ダーリンは外国人」—ベルリンにお引越し—(株)KADOKAWA
- 北川郁子(1985) 研究・実践報告「古くて新しい疑問:なんで英語やるの?」—国際理解教育の視点から—『英語教育研究』第 21 号 神奈川県高等学校教科研究会英語部会編
- 北川郁子 全朝協編(1998)「多文化共生時代におけるエスペラント教育の意義と可能性」『これからの在日外国人教育'98』
- 木村護郎クリストフ(2014)「計画言語エスペラント」(リレー連載 多言語世界へのまなざし 第 10 回)『英語教育』1 月号大修館
- 田中克彦(2007)『エスペラント—異端の言語』岩波新書
- 一般財団法人日本エスペラント協会編(2009)「国際語エスペラントへの招待」
- 後藤斉 東北大学大学院文学研究科

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/manifestoprago.html>,

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/espj.html>

KITAGAWA Ikuko (1995)“An old and yet new question: Why Do We Teach English?”
—from the viewpoint of education for international understanding—(1995 北京女性会議 NGO フォーラムにて配布の小冊子『3 人の普通の女が考える女性、平等、言語』に英語版を収録)

Significance and Potential of Esperanto Education

Ikuko KITAGAWA

Esperanto is a language that enables us to easily communicate with people with different linguistic backgrounds, and provides students with opportunities to open their mind to diverse people and cultures. In addition, it is proven to help students learn other new languages with ease. In spite of these advantages, however, Esperanto is not a language commonly taught in Japanese schools. This paper, based on the author's personal experiences of teaching Esperanto at schools and in communities for a number of years, discusses the significance and potential of teaching Esperanto as a second language in Japanese schools.